

目 今月のおすすめ本 目

『おひとりさまの逆襲 「物わがりのよい老人」になんかならない』

著者名 上野 千鶴子、小島 美里
出版者 ビジネス社
出版年 2023
分類番号 369.26/ウ

自分がどの様な最期を迎えるか、なかなか難しい問題ですね。この本は団塊の世代が後期高齢者(75歳以上の高齢者)になり、要介護認定率上昇・介護保険財政を圧迫するとされる2025年問題の状況や、それに対する意識についてアンケート結果等も挙げその現状を明らかにしています。法の改正に対してのアクションや、コロナ禍での「在宅療養という名の放置」などニュースで聞いてはいても、自分が介護する側される側若しくは自分の家族がその状況でないと、自身の問題と実感できないかもしれません。しかし、すべての人に老いはやってきて、認知症や その他病気にならないことはないと考えれば、その意識づけの一冊として読んでみてはいかがでしょうか。

介護保険はもともと地域格差があってもOKというところから始まっているので、例えば在宅で最期を迎えたいと思っても、在宅看取りができるところに住んでいる人はラッキーですが、そうじゃないと難しいという事になってしまうそうです。そう考えると、子育てのしやすさ・補助金の多さで住む場所を決める一因になっているのと同じ様に老後に向けての住処の決め手は、自治体の手腕にかかる時代になってきているのかもしれないですね。団塊という切り口ではありますが、団塊ジュニアの世代の厳しい現状にも触れられています。この本は、色々な世代にとってこれからの自分のライフデザインをどうしていくかの一考としても良い本と思われる。

同作者の図書

『人生のやめどき しがらみを捨ててこれからを楽しむ』【367.7/t】

樋口 恵子、上野 千鶴子/著 (2020) マガジンハウス

『上野千鶴子が聞く小笠原先生、ひとりで家で死ねますか? 』【498/ウ】

上野 千鶴子/著 (2013) 朝日新聞出版

『庭園家ガートルード・ジーキル ヴィクトリア朝の女性キャリア』

著者名 川端 有子
出版者 玉川大学出版部
出版年 2020
分類番号 289.3/シ

ガートルード・ジーキルというイギリス・ヴィクトリア時代の女性庭園家は、日本であまり知られていないですが、私たちが「イギリスの庭」から連想する、バラを這わせたコテージ風建物と それに調和したタイプの庭を作ったその人だといわれています。

ジーキルはある程度の生活ができるジェントリー階級に生まれ、両親は芸術を好み当時の「女性は家庭に入り・・・」という型にはめることなく娘を美術学校に行かせました。ジーキルのキャリアは画家や工芸家の方が早く 当時としては珍しく、作った作品で少しなりともお金を稼ぐこともありました。若いころには考古学者夫婦に連れられた地中海の旅行など恵まれた出会いや経験があり、そこから生まれる人脈も恵まれヴィクトリア時代を代表する評論家のジョン・ラスキンや、「モダンデザインの父」といわれているウィリアム・モリスなどが知人に名を連ねている事からも、その時々で色々なチャンスをものにできる人物だったと言えるでしょう。また46歳の時に会った当時駆け出しの建築家エドウィン・ラッチェンスとの出会いが、その後の充実した活動の源となりました。ジーキルが庭を、ラッチェンスが家をと二人で作る庭はラッチェンス/ジーキル様式とよばれ、人々のあこがれの的となりました。

執筆物も『森と庭』1899、『イギリスの庭のためのバラ』1902、『花の庭の色彩計画』1911などあり、雑誌『ガーデン』の編集長も一時任されたりする等、当時のまたは今日へも影響を与えています。いまの石垣・植栽の調和、色彩を考えられた花壇や植え込み蔓ものをはわせた棚の向こうに緑の丘が見えるという、正にイングリッシュ・ガーデンのイメージを形作った人物がジーキルです。両親により当時のジェンダー観にあまり影響されずお金の心配もない生活ができたという幸運はあるかもしれませんが、友人の言う「どんな女の子も努力すればなりたいたいものになれるはず」という言葉からも、現状から努力しキャリアを重ねる姿勢が仕事への充実につながったのではないのでしょうか。

イギリスのチェルシーフラワーショーで、エリザベスIIが「緑の魔術師」と日本人受賞者を称されたりもする近年、ガーデニングに興味のある方そうでない方もこの一人の女性庭園家の本を読んでもみるのはいかがでしょうか。

ヴィクトリア時代・その後のキャリアについての図書

『写真家ジュリア・マーガレット・キャメロン ヴィクトリア朝の女性キャリア』

【740.233/カ】 川端 有子/著 (2019) 玉川大学出版部

『マリー・キュリー フラスコの中の闇と光 グレート・ディスカバリーズ』

【289.3/コ】 B.ゴールドスミス/著 (2007)WAVE出版

『メアリー・アニングの冒険—恐竜学をひらいた女化石屋』 【289.3/㉟】

✉川 惣司/著 (2003) 朝日新聞社

→絵本もあります『化石をみつけた少女 メアリー・アニング物語』

✉ャサリン ブライトン/作 (2001) 評論社

『博論日記』

著者名 ティファンヌ・リヴィエール/著、中條 千晴 /訳
出版者 花伝社
出版年 2020
分類番号 726.1/リ

この本は、ある一人のフランス人女性が3年で終わるつもり博士論文を倍以上の年月をかけ、苦難の末書き上げていく悲喜こもごもの話です。漫画形式でフランスのものなので、左から右に読み進めていく形となっています。院生を取り巻く状況も日本と違うところもあり面白いものがありますが、論文を書くという孤独な世界で格闘し論文を創り上げていく精神的・肉体的な苦しさは世界中で共感を持たれていて解説でも「院生の「バイブル」のような存在」といわしめ、6か国語に翻訳がされています。

主人公ジャンヌの最初の1年目の希望に燃え張りきった顔が、証明写真風に描写されそれが3年4年と経つにつれてやつれて生気を失っていく様が描かれ、リアリティーが感じられます。周りからは「で、まだ博論書いてるの?」と言われ続け、外の世界と交流を持てなくなり、同居していた恋人とも別れてしまいます。内なる世界で書き続ける論文は城の描写でイメージされ、途中からジャンヌの手に負えなくなるくらい巨大なものになってしまっていきます。なんとか書き上げても、口頭試問。それを通過しても、「研究」という茫洋とした世界の入り口にたどり着いたにすぎません。

院生の厳しい状況については、巻末の解説にも文章があります。「指導教官の「不在」も日常茶飯事となっています。」と書かれていて、本書の中にも「まあちょっと質問すれば、次は数か月後でいいか」等「バカンス中なのに面倒だな」という様な指導教官の描写が強烈に描かれています。実際どうなのかと、周りで聞いてみたところ時には厳しくもありますがしっかり指導してくれる教授の話しか耳にしなかったのでとりあえずのところはありがたいことだ、と感じました。また、貸与制の多い日本の大学の奨学金制度や、資格を取っても生かせるポストが少ないという現状等、今後の研究者の未来について色々と考えさせられる本でもあります。